



studionAme & Youkobo Art Space - マイクロレジデンスによる協働試行 -

目次

I. studionAme & Youkobo Art Space - マイクロレジデンスによる試行

II. 2019年プログラム概要

III. 活動報告

- 日本を理解する：遊工房アートスペースでの2か月間の滞在

- 層序を編む

IV. あとがき

付録

I. studionAme & Youkobo Art Space - マイクロレジデンスによる試行

滑川由夏、スティーヴン・アルバート
studionAme代表・創設者

studionAmeは昨年、東京に拠点を置く2つの独立した組織と協力して、国際的なアーティスト交換の可能性を探った。これは、studionAmeと遊工房間で行われた交換プログラムであり、studionAmeの観点から言及している。

英国と日本の間の交流のアイデアは、各々の国でアートが作られ、考えられ、話されてきた異なる方法と、それらが何を改善するために他の各国/文化から学ぶことができるかについての会話から出てきたことで、それを試行した。

それを非常に単純に言うと、日本は工芸と技術の面で定評があり、英国は批判的な分析と談話で定評がある。お互いに教え合える何かを持っている。目的は、組織間だけでなく、アーティストとゲストの都市/国の中で、異文化間および技術的な会話を可能にすることであった。

私たちの希望は、この会話がのちに、おそらくより大きな肯定的な変化、または少なからず長所と短所のより広い理解に関わるいくばくかの種まきとなり、全員が将来、その知識とスキルを向上させることにあった。

遊工房と一緒に仕事ができることを大変光栄に思っている。アーティスト・レジデンシー分野での長年の経験は、このパイロットプログラム全体を通じて十分な情報とサポートが得られ、仕事がスムーズになり、ストレスがなくなった。

当初から遊工房には感銘を受けていた。彼らのレジデンシーアーティストのレベル、東京での彼らのスペース、そしてアーティストを支援する彼らの献身。また、studionAmeを訪問し、何人かの主要な意思決定者と直接会うためにした努力に非常に感動した。

選択プロセスは私たちにとって少し難しいものだった。レスターに拠点を置くアーティストを推薦するため、遊工房の研究レジデンシーに紹介したいと思う適任の候補者が不足していた。幸運にも、レスター大学の博士課程の適任な研究者から連絡を受けたのは本当に良かった。

同様に、studionAmeのレジデンシーに応募アーティスト数には少々がっかりし、選択できるアーティストのうち受け入れたい候補者は2人しかいなかったと（限られた経験で）感じた。

石黒昭さんを歓迎することに興奮した。彼の技術的な能力とアーティストとしての一般的な履歴の背景ではないことに、他のアーティストとは違うものを感じた。

このような素晴らしいレジデンシーの申し出に対して、将来の対応を改善することは時間とお金のかかる大きな投資ではあるが、利益を最大化するために取り組むべき重要な分野である。

組織間のコミュニケーションは（私たちの意見では）全体を通して非常に良好であり、誤解は無かったとおもう。遊工房の組織のスキルと経験は貴重であり、そうでなければ複雑で困難なプロセスに感じられただろうが、私たちの活動を非常に容易にした。

私たちのDMUの連絡先担当者は、レジデンシーが始まる直前に美術および人文科学の責任者のポストから辞任したが、約束どおり、プログラムの提供ができて非常に満足してる。昭さんのレジデンシーの途中まで、

DMUの担当者の代替は無く、 StudionAmeとDMU間の通信は途絶えたが、レジデンシーの後半でやっと修正できた。昭さんは必要なときにワークショップ施設にアクセスできるようになり、アーティストトークの時間もその時はまだ予定されていた（他の理由で無くなったが、）。昭さんは、他の日本のパートナー組織のレジデンシーから帰国したばかりのアーティスト、アリソン・カーペンター・ヒューズとのプレゼンテーションで、彼の作品とキャリアについて短いプレゼンテーションを行った。

ヤンとヤンの博士課程のスーパーバイザーの助けを借りて、Jan Zalasiewicz教授への個人的な紹介を頂き非常に有り難かった。昭さんの主な目標の1つはJan教授に会うことだったので、いくらかの困難と一回機会を逃した後で、昭さんは自身で働きかけ、最終的にJan教授に直接会った。ヤン教授も後にアキラの展示に来訪した。

昭さんには私達もstudionAmeのアーティストも両方ともよく接した。何かあったとしても、オーガニックに何が起こるかのか見たかったので、アーティストの特別なリクエストはしなかった。

アキラは日帰り旅行に連れ出され、レスターを歩き回り、夕食、パブ、オープニング、アーティスト宅も訪問し、アーティストが関わり（スタジオに）絶えず立ち寄った。彼は、私達と一緒に働いていたstudionAmeアーティストファミリーの一人となった、アーティスト達に感謝しており、昭さんのレジデンシーに深く関わってくれたことに非常に満足している。

私達は時間を費やし、昭さんの宿泊、フライト、および奨学金などの資金提供は予定を上回った。私達はレスターに少なくとも週に1日平均（記載されているように）滞在し、彼の旅を容易で快適なものにするためにできる限りのことをした。

アキラはどれだけうまく活動したのか、私達には言えないが？彼は非常に断固としたアーティストであり、自身が誰で何をしているのかに非常に強い考えを持っている。私達は彼の批判的な言説に答えようとしたが、常に受け入れられたわけではない。昭さんに私達のものを含む他のアーティストの手助けを促したが、彼は退けた。昭さんは自分がやろうとしている仕事について非常に明確なアイデアを思いつき、気を散らすことなくこれを達成した。

私達にとって、この経験は挫折と報いの両方であり、やりがいのあるものだった。私達のレジデンシーに欲するもの、それが何であり、何を変えるのかについて多くを学び、また、私達が上手く行ってきたこと、そしてどのように私達が期待以上のことをしているのか、実際に国際的な滞在者のための標準的な慣行について学んだ。

なので、日々の生活と芸術のすべての教訓を超えて、最初の仮説を証明した。-日本と英国の文化では芸術が異なって作られ、見られており、お互いを理解し、互いに学び合うことに一層の努力をする必要があるということだ。

この機会に、遊工房の皆さんの努力、支援、指導に感謝する。

II. 2019年プログラム概要

1. プログラム概要

共にマイクロレジデンス*である遊工房アートスペース（東京・日本）とStudionAme（レスター・英国）の交流は、2018年から始まる。若いアーティストやリサーチャーが活発に異文化に赴き、活動することの重要性とそこから生まれる可能性への期待（Y-AIR*）を共通項に、ディレクターによる相互施設訪問を経て2019年、交換プログラムが開始された。遊工房アートスペースには研究者のヤン・チェンが2ヶ月間、そしてStudionAmeにはペインターの石黒昭が3ヶ月間滞在創作をした。



2018年 遊工房アートスペースにて



2018年 studionAme



2018年 デ・モンフォート大学

2. アーティスト活動

ヤン・チェン

2019年10月-11月（2ヶ月間）遊工房滞在

1991年 中国生まれ、ロンドン在住。レスター大学美術館研究科の博士課程3年生。戦後の日本アートコレクティブ実験工房と東京都美術館の関係を理解するため、理論的な枠組を研究。概念の枠組は、分析心理学者河合隼雄の中空構造とドゥルーズの脱領土化を基に展開される。

発表：2019年11月10日 遊工房アートスペースにて「日本芸術と美術館の歴史における渦巻式構造」（Artists' Talk 「回顧と展望」内で研究成果を発表及びモデレーション）



石黒昭

2019年9月-11月（3ヶ月間）studionAme滞在

1974年 神奈川県横浜生まれ、埼玉県在住・制作。大理石の表層を絵画として極めてリアルに再現するシリーズ「GRAVITATIONAL FIELD」やその発展として作家の創造の源泉を抽象画として表現するシリーズ「Marblesque」などを通して、本物とまがい物、虚と実について考察している。

発表：2019年11月22日～29日 studionAme プロジェクトスペースにて個展「PERSPECTIVE」



III. 活動報告

日本を理解：遊工房での2ヶ月間の滞在

ヤン・チェン

私の師が遊工房の研究滞在プログラムに関するstudioAmeからのメールを転送してきた時、私は、千載一遇の機会だと思った。このレジデンシーによって日本について深い理解が得られるだろうと応募を決めた。以前に数回日本を訪れたことは有ったが、平均約10日間の滞在でしかなかった。短期間では、観光以外の日本の違う側面を見ることはできないと感じていた。また、国立国会図書館のデジタルデータベースで、東京のサイトでしか見ることができないドキュメントをさらに発見した。レジデンシーが私を受け入れてくれたら、図書館で十分な時間を費やし、それらのドキュメントを手に入れ、新しい何かを発見したいと考えた。幸いなことに私は選ばれた。出発時間が迫ると、馴染みのない国での新しい生活を始めることに、少なからず興奮と不安が入り混じっていた。

遊工房到着後、すぐに他のアーティストに会う機会があった。全員、私よりずっと年上だったので彼らから新しいことを学びたいと思った。驚いたことに、この組織は創設30年目であった。記念のトークイベントを開催する予定で、終日のイベント全体の準備と実行に参加できて嬉しかった。日本人に囲まれるのは初めてで、英語を話せる人々と話せない人々がいた。言葉の壁があったとしても人々はお互いのコミュニケーションに最善を尽くしていた。ここで私が経験した最も貴重な経験の一つは、日本の芸術界が現在どのように機能しているかを学ぶ機会を得たということだった。私は、画壇が日本の芸術界をコントロールするのに、いまだに非常に強力であることに感銘を受けた。

100年以上にわたって存在してきたシステムとして、彼らが、その活力を、如何に伝統を継続し保っているのかと思った。私のリサーチでは、日本の文化には伝統と革新という2つの側面があると気付いた。現時点では、まだ、この2つの側面を見ることができる。たとえば、国立科学技術革新博物館では最先端の人間のようなロボットを見ることができ、100年以上も変わらなかった技術を使って手仕事を続けている日本の職人の技を見ることができる。さらにまた、トークイベントの前に、私は参加アーティスト全員のスタジオを訪れ、彼らの作品のイメージを掴んだ。今回の滞在期間中に遊工房には、ニューヨークから2人、ニュージーランドから1人、日本から1人の計4人のアーティストが滞在制作していた。ニューヨークの2人のアーティストは、12年前にここでレジデンシーを行い、遊工房の30周年を振り返るために招待された。また、日本人アーティストの方は、組織の知古でもあった。彼らの作品を見て刺激を受け、日本人と西洋のアーティストの概念的な違いに気づいた。トークイベントでは、日本の美術界の人々が東京オリンピック2020について懸念を抱いていることを知った。将来の日本の美術界が大きく変わる可能性がある。

トークイベントへの参画に加えて、武蔵野美術大学での講演にも招待された。予想外であった。単なる観光客では大学の人々と連絡を取る機会がないので、大変幸運である。聴衆は、油絵部の1年生と3年生で、私は彼らに日本の美術館の歴史を語ることにした。学生は静かで質問は無かった。彼らの教師は、若い美術学生を鼓舞するのは難しいと言っていた。この状況が2020年以降に変わるかいなかに興味がある。

実際、私は国立国会図書館で多くの時間を費やした。明治時代の博物館システムの確立に関する公式報告を含む多くの新しい文書を発見した。日本がサウスケンジントン博物館と1ハイドパークでの大展示から学ぶ必要があると述べた資料。新しい文書に基づいて、現代（明治）のアートワークのための美術館が美術館システムの一部ではなかったことは明らかだ。代わりに、政府によって決定され与えられた、コンペティションに関連するアートのプロモーションである。東京都美術館のエンプロティネスに関連する議論は、明治以降、また、私の研究が埋めることができる戦後の期間までさえ、文書には決して現れなかった。また、博物館のカノンと画壇のカノンについても新しい考えがあった。アーティストが関わろうとする西洋の美術館とは異なり、日本の美術館にはこの機能が無い。代わりに、画壇はアーティストを昇進できるかどうかを決定した。アヴァンギャルドなアーティストは、戦後、代替スペースを使用して画壇に挑戦しようとしたが、継続的には失敗した。

全体的に、遊工房で過ごした2か月は、日本と日本の美術界を異なる角度から見ることができた。将来また戻って来たい。



イギリスのレスターにおける遊工房とStudsonAmeの交換プログラムへの参加は、人新世研究の第一人者(国際層序学委員会の「人新世」作業グループ長)であるヤン・ザラシーヴィッチ教授がレスター大学で教鞭を執っていることを知ったのと、偶然にも同じタイミングで参加者募集を知ったことが切っ掛けだった。

私と人新世という地質学の言葉との出逢いはまだ浅い。がしかし、その概念とは20年以上前に遡る。独学で修練を積んだマーブリングを通じて、地球の血脈を型として捉えてきた。新たな言葉はとても自然な形で融合された。

私は渡航前にヤン教授の著書「小石、地球の来歴を語る」を読み終え、地質学に対しては無知でありながらも、強く共感する一節を見つけていた。その一節は、マーブリングに於ける思想上の型と合致していたのだ。直ぐにもレターを書きたかったが、英語力の未熟さと繋がることの重要性ゆえ、彼へのコンタクトは慎重だった。結局、私はレターを送ることが出来ないまま渡航した。渡航後にディレクターを通じて政治的なコンタクトを試みたが、この様な手法は深く刺さらないことは知っていた。案の定、それは失敗して失望した。最も大事な部分を他人に委ねたことの反省から、自分の中の情熱に火を灯してレターを送った。それは深く彼の心を捉えた。

彼の著書の中に「ウェールズの海岸」、「私たちの小石」という言葉が度々出てくる。それはウェールズ西岸のアベリストウィスに広がる小石の海岸ことであり、私は約束の日の前日に現地へ赴き、雨降る暗い夜の海岸で小石を拾い集めた。雨に濡れた小石は街灯の光を受けて、宝石のように輝いていた。私が持ち帰った「私たちの小石」は彼の地質学者としての好奇心を掻き立て、彼はポケットからルーペを取り出し、その場で分析が始まった。

話題は人新世に移り、私は率直に「人新世は既に始まっていますか?」と彼に尋ねた。3年前まではまだ定かではなかったが、答えは既に始まっているというものだった。それは1950年から始まったという、具体的な時期も提示された。その根拠は、今日に至るまでの人間の活動の幅広い範囲で、継続的かつほぼ同時に成長率が急上昇している、いわゆるグレート・アクセラレーションによる大変化である。我々の地球は人新世という新たな地質年代に突入したと定義付けられたのだ。つまり、それは46億年の地球の歴史の中で、層序の表層にいる我々人類のたった一世代の間に地質的大変化が起きたことを意味する。

そして、人新世の将来像について話が及んだ。それは我々は既に存在ないであろう未来。形あるものは分解され、様々なものが混ざり合うマーブレスクのイメージを私が彼に話したところ、彼はそれに同意し、「全てはすり潰されてシルトのようになるだろう」と付け加えた。そして私が「その世界にも重力は作用しているだろう」と言うと、彼は「その通りだ」と頷いた。マーブレスクで描く私のイメージした人新世の世界は、彼のイメージと一致した。これは今後、大きな意味を持つだろう。

私がアベリストウィスから持ち帰った「私たちの小石」は彼のもとでスライスされ、顕微鏡で覗いたミクロの世界の画像と、来歴の分析が添えられた。あの時、私は地質学への扉を叩いたのだ。



IV. あとがき

村田達彦
遊工房アートスペース 共同代表

世界のマイクロレジデンスの1つである英国レスターの「studionAne」との最初の接点は2018年4月下旬、「studionAne」の創設者であるStevenとYukaの2人のアーティストユニットが遊工房を訪問、その年の6月には私達の現地訪問の機会がすぐに訪れ、相互訪問と理解を深め、両国のアーティスト間の相互交換プログラムの始まりとなった。

世界の繊維産業の中心であるレスターは過去のものであり、アーティストが使用するスタジオスペースは簡単に見つかるが、首都ロンドンからは、近そうで遠い位置にあるレスターの状況を理解することも重要だ。また、スタジオ訪問に加えて、地元の2つの大学の関係者と話をする機会もあり、AIR間のアーティストの単なる交換だけでなく、地元の教育機関との協力にも備える状況に感銘を受けた。その後、交換プログラムに関する具体的な協議が進められ、翌年の2019年の交換プログラムの実現に向けた準備が整った。

由夏さんの調査によると、由夏の父親である滑川徹氏は、私の大学時代の同級生だった。正直なところ、私は何か不思議な縁を感じた。

AIR事業者間の直接交流を背景に、この活動を継続することで、AIRプログラムでのアーティスト交換の新しい道が開かれることを願っている。

AIR団体紹介

StudionAme

地元レスターを拠点に活動するアーティスト等が、スタジオで制作し、プロジェクトスペースでの個展に向けて取り組む。地元の人々には、個展開催を含む、少なくとも3ヶ月間のフリー・スタジオの機会が、約£700で提供される。StudionAmeは、現在、地元の滞在制作者に、他の国際機関と繋ぎ毎年最低1回の交換プログラム「Toru Namekawa International Residency」を提供できるよう拡大しており、本交換プログラムはその一環として実施。

<http://www.studioname.co/>



遊工房アートスペース

1989年以来、国内外のアーティストが滞在制作するアーティスト・イン・レジデンス(AIR)、作品を展示発表する実験ギャラリーとスタジオを軸に、AIRの推進・支援、アートを通じた国際交流やコミュニティ活動、人材育成にも取り組んでいる。滞在制作 (AIR) は、これまでに約50カ国から340余名の海外作家に、スタジオ・実験ギャラリーは、250名以上の在京アーティストを中心に利用頂いている。

<http://www.youkobo.co.jp/>

